

1951: モーリス・メルシエ 憎しみの叫びは一つもなかった

MRA 専従者のスイス人勤労者ジャン＝ジャック・オディエは、1951年にコーを訪れた大勢のフランス産業界の代表団の後ろ盾であったモーリス・メルシエに初めて会ったとき、それほど感銘を受けませんでした。「彼は通りのバーの裏で給仕をしていますが違和感がなかつたろう」、オディエは、フランス労働総同盟・繊維労働者連盟の事務所で会ったときのことをこう書いていました。しかしその数週間後、「オディエは彼のことをよく知るにつれ、私たちは彼が並外れた人間であることを発見しました」。

メルシエは13歳の時に繊維業界で働き始め、フランス労働総同盟（CGT）を経て出世しました。第二次世界大戦中、彼は共産主義者でありレジスタンスの勇氣あるメンバーでした。戦争が終わると、彼は労働組合が労働者の権利のために闘うよりも政治を優先していると感じました。そして彼は労働組合を去りましたが、闘争の同志と彼を突き動かしたイデオロギーのことが頭から離れることはありませんでした。

1950年、ジュネーブの銀行家の息子であるオディエとイギリス人の同僚ビル・ポーターがメルシエに会ったとき、メルシエは冷笑的で落胆していました。しかしメルシエ達は、オディエが階級闘争を超えた創造的なエネルギーと行動変容のアイデアを素早く取り入れたことに、衝撃を受けました。その夏、コーを訪れたメルシエは次のように言っています。「憎しみの叫びを一度もあげず、労働時間を一時間も失わず、血を一滴も流さない。それがMRAが経営者と労働者に挑む革命なのだ」。

オディエとポーターは、1951年6月にアメリカのマキノ島で開かれたMRAの会議にメルシエを招待しました。メルシエの視野が広がるかもしれないと考えたのですが、11年間共産黨員として活動していた労働組合員にビザを発給するのがどれほど難しいか、オディエとポーターには想像もつきませんでした。しかし、すべてがうまくいきメルシエはマキノ島の会議でMRAの創設者フランク・ブックマンに会いました。フランス語を全く話せないペンシルバニア出身のルーテル派牧師(ブックマン)と、大陸から出たことのないフランス人労働者(メルシエ)、それは心と心の奇妙な出会いでした。ブックマンは闘争的な無神論者の中に人間性を見出し、メルシエは確信に満ちたキリスト教徒の中に革命家を見出しました。メルシエはブックマンのことを、「彼は真の革命家の証であるビジョンを持っていた。そして、彼は私がビジョンを見つける手助けもしてくれた」と言っていました。

マキノで出会ったアメリカ企業の代表団に触発されたメルシエは、ヨーロッパに帰る道中、コーでも同じような会議を開くことを決意しました。メルシエはフランス北部をくまなく回り、労働者たちにコーに来よう勧め、経営陣にその旅費を出させました。1951年秋には、主に繊維業界から80社のフランス企業がコーに視察団を送りました。

ある繊維会社の経営者は、「私は、自分の事業を個人の所有物のように扱っていたことに気づいた。自分のために労働者に使い走りをしてもらったり、自宅を暖めるために石炭を工場から調達したりすることは、まったく普通のことに思えた。私は自分の生き方を完全に変えようと決心した」と話しました。

ある工作機械工は、「ブルジョワや経営者たちは傲慢で邪悪で、プロレタリアートを支配し、我々を抑えつけることしか考えていないと思っていた。彼らが私たちとの労使間の壁を乗り越え、新しい世界を築くために働くなんて想像もできなかつた」と話しました。

「信頼の雰囲気醸成された」とメルシエは言っています。この結果、1953年に繊維業界横断的な協定が結ばれ、当時64万8,000人を雇用していたフランスの7,000の繊維工場の労働条件と労使関係が一変しました。

エリアン・スタリーブラス 信頼の雰囲気醸成された



Maurice Mercier speaking at a meeting in Lille, France



Maurice Mercier (2nd from left) in Caux with William Nkomo, François Bekoungou and Harry Wickham